



Title	外来語の社会言語学的研究
Author(s)	陣内, 正敬
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46598
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 ^{じんの}陣 ^{うち}内 ^{まさ}正 ^{たか}敬

博士の専攻分野の名称 博 士 (文 学)

学 位 記 番 号 第 19838 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 17 年 11 月 2 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 名 外来語の社会言語学的研究

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 真田 信治

(副査)

教 授 土岐 哲 助教授 石井 正彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、社会言語学の視点から現代日本語における外来語現象を切り取り、その見方や見え方、そしてそれとの向き合い方を提示したものである。いわゆる社会言語学の守備範囲は広いが、日常の言語生活という文脈のなかで浮かびあがってくる外来語の姿、あるいはそれが引き起こすコミュニケーション不全の問題を正面に据えることが、本論文での一貫した立場である。

論文は大きく4章から構成されている。

第1章では、外来語現象を人間や社会からとらえる観点を示し、それをもとにした研究方法を論じている。外来語の現代的論点として「言語文化論」と「言語生活論」といった2つのものがあるとする。前者は外来語をひとつの言語文化現象としてとらえ、文化接触や文化的アイデンティティーなどを中心に据えて論じる切り口である。一方、後者は現実のコミュニケーションに身を置いてとらえた切り口であり、外来語の持っているコミュニケーション機能や現実生活での問題など、具体的な運用の実態を明らかにし、問題解決に向けた実践的姿勢を旨とするものであるとする。

第2章では、外来語を接触現象として見た場合の言語体系面での変容の実態や、在来語と外来語との使い分けの実態、外来語使用の効果など、言語運用面から見た議論を展開している。具体的には、和語・漢語と外来語が使い分けられる際の条件の詳細な記述、同一人物の発音行動の経年的調査、さらには曲名やテレビ番組名の時代的変遷の跡づけなどである。

第3章では、申請者自身のアンケート調査や各種世論調査をもとに、現実生活のコミュニケーション問題として浮かび上がってきている外来語の姿を明らかにしている。外来語を現代日本語社会におけるコミュニケーション不全の一要因として考察した結果として、「カタカナ語弱者」さらには「情報弱者」を生まない言語環境とコミュニケーション環境が必要であるとし、徳川宗賢が提唱した「ウェルフェア・リングイスティクス」の思想を反映した外来語政策の緊急性を指摘している。

第4章(最終章)では、「外来語政策」(国、組織、個人などの外来語に対する考え方と取り扱い方)といった視点からの考察を行っている。まず、外来語政策において日本と対照を成すフランスの政策と対照しつつ、フランスは外来語「駆除型」、日本(国語審議会)はどちらかといえば「自然淘汰型」と位置付けている。そして、外来語の発信者が採るべき方策について、その考え方と具体策を検討している。官公庁や日本全国の自治体の取り組み方についての申請者の調査からは、その地域的濃淡が明らかになった。また、2002年8月より「外来語委員会」(国立国語研

究所)が行っている外来語の言い換えに関して、ロジャースの普及理論を援用しながら語の言い換えのタイミングについて見解を述べている。さらには、外来語問題に向き合う姿勢を形成するものとして、一般の日本人がこの現象を共有する必要がある、そこでは学校教育の果たす役割が大きいとする。そして、小・中学校の国語教育で用いられている文部科学省の検定教科書を調査して得られた結論として、単に国語の知識として外来語を教えるのではなく、言語生活のなかでの働きやその功罪などを意識的に提示し、そのことについて考えさせることが重要であることを主張している。

論文審査の結果の要旨

本論文の持ち味は、これまでほとんど触れられることのなかった言語生活論的立場からの外来語考察にあり、そして、その立場からの研究を支えるための方法論の提示にある。

本論文で申請者は、ことば一般の社会言語学的研究方法として、「社会性」「集団性」「変異性」「開放性」「実践性」といった5つの特徴があるとし、外来語の社会言語学的な研究においてもこれをもとにした枠組みが設定されるとする。

外来語の研究としては、①個々の音や語あるいはそれらの体系など「言語要素」を中心にし、外来語そのものへの関心が向かう分野、②外来語がどのように意識され運用されているかという、人とその「言語運用」を中心に据えた分野、そして、③組織や集団などの「言語社会」のなかで外来語をとらえる分野などがあるが、このうちの第3の分野は多分に政策的でもあり、上の5つの特徴とのかかわりにおいて、そのいずれの特徴をも有するという点で、もともと社会言語学的な分野であるといえよう。本論文で主たる対象となっているのはこの第3の分野である。

外来語論争は昨今かまびすしいが、本論文では、客観的なデータに基づいて、あくまで慎重に科学的に論じており、説得性のある内容になっている。現在の日本語のなかにおいて外来語を「駆逐する」姿勢ではなく、うまく「育てる」ためにどのような施策が必要であるかを検討し、また、教育のなかでの扱いに関する貴重な提言をしている。

申請者はまた、かつて研鑽した生物学での成果も踏まえ、外来語現象を生物世界に見られる外来種の侵入と新たな生態系の形成になぞらえて、外来語の増加自体は議論の前提として共有しておき、それがコミュニケーション不全の要因とならないような現実的方策を考えるべきであるとする。そのバランス感のある、柔軟かつリベラルな主張には納得できるものがある。

外来語に対する大局的見地として、外来語問題は日本社会の変容を見据えながら考えるべきであり、他のもろもろの言語生活上の問題と絡めながら、その解決方法を探っていくべきものであろう。その意味では、外来語だけを眺めていては見えてこない日本語全体としての流れを読み取り、その文脈のなかでこの問題に立ち返る必要があると思われる。

その点に関していえば、本論文での考察は外来語だけに特化しており、日本語全体の流れのなかでの外来語の位置づけについての考察がやや不足しているようにも見受けられるのである。しかしながら、この点は、自ら研究を推進する力を持つ申請者の今後に期待すべき事柄であり、けっして本論文の価値を損ねるものではない。

以上のように、本論文は、今後の研究に指針を与えるものとして、博士(文学)の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。